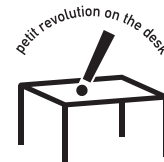


Vol.65

## 机の上の小さな変革



# 当たり前からの解放

こんにちは、菅俊一です。今回は、私たちの生活や社会のなかで「当たり前」とされていることについて、あえて「当たり前ではない」という前提で考えてみたいと思います。

たとえば、「エレベーターのボタンを押すと光る」ということは当然のように感じられますが、「エレベーターのボタンは押しても光らない」ものとして考えてみると、私たちの行動や感覚にどのような影響を及ぼすのでしょうか。

もしボタンを押しても光らなければ、自分の指示が正しく受け付けられたのかわからず、エレベーターが動き始めたとしても本当に指定した階に止まるのだろうか、実際にドアが開くまで不安な気持ちを抱き続けてしまうはずです。

また、「水道の蛇口をひねると清潔な水が出る」ということも、私たちの社会では当たり前のことになっていますが、こちらもそうではないものとして考えてみるとどうでしょう。

清潔である、という前提が保証されないと、蛇口をひねって出てきた水はそのまま飲んでも安全かわからないため、必ず沸かして飲むという行動を起こすようになるはずです。もしかしたら、そもそも水道の水を飲まなくなるかもしれません。

ほかにも、私たちは「時間どおりに電車が運行すること」を当然のこととして受け止めています。しかし、仮

にそれが当然でないとするとすれば、社会のなかで誰もが時間どおりに行動するということが、必ずしも重要ではなくなる可能性も出てくるでしょう。

## 前提を疑うことで想像を飛躍させる

ここまで、インフラとして扱われているシステムを例に挙げましたが、私たちは無意識に、こういったシステムやインフラが「安定的に正しく動く」ということを当たり前のもので暮らしています。

システムについて疑うことなく暮らせるというのは、ある一面においては豊かさの象徴でもあるわけですが、一方で、前提を疑わないということは、自分たちとは異なる前提を持つ環境での暮らしや状況を想像できないということでもあります。

この考え方をさらに広げてみた場合、現在の環境やシステムの前提を疑わないまましていると、いまあるシステムは本当に便利なのか、それとも単に自分が不便さに慣れてしまっているだけなのか、気づけなくなってしまう可能性もあります。

今回のように、身近な環境やシステムなどのふるまいに対して、当たり前だと思っている前提を疑う、あるいは見直すことを意識的に行なうことで、私たちは状況を無条件に受け入れる習慣から脱し、新しいシステムやサービスを構想することができるようになるのです。 ▲

### PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。